

# 婦人と子ども

大正六年八月一日  
第十七卷第八號

## 本邦幼稚園の發生時代

小西 信 八

我が國に創めて設けられた幼稚園は明治九年六月に東京女子高等師範學校(現今)の附屬として設立せられた幼稚園である。その時の保姆主任は獨逸の婦人で松野クララといふ人であつた。クララ女史は、獨逸へ留學した松野礪氏の夫人である。幼稚園の幹事としては關信藏氏が任に居られた。

現今でも、幼稚園に關する著書は、我國に於ては、非常に尠いのであるが、當時にあつては幼稚園に關する著書は、纔かに二種を數へたに過ぎなかつた、而してそのいづれもが言ふまでもなく翻譯書であつたのである。一つは女子高等師範學校から出版したので「幼稚園記」といふのであつた、これは三冊になつてゐた。米國人ドゥアイ氏の著書を翻譯したもので、譯者は今言つた幹事の關信

藏氏である。この本は大體に於て、理論が主であつたが、譯し方が悪いのか、原著の論旨が徹底してゐないのか、随分と分りにくい本であつた。關信藏氏は亞米利加へも行かれた人で、却て篤學の士であつたが、惜しいことにはその後間もなく世を去られた。

「幼稚園記」と殆んど同じ頃に、文部省から出版されたものに、「幼稚園」といふのがあつた。これも矢張三冊になつてゐた、クリツヂの著書を翻譯したものである、クリツヂといふのは、英國人が獨逸人か私は判然と記憶して居らぬが、兎に角この原書は英文で書かれてゐた、今でも多分女子高等師範の書庫にこの原書は保管されてある筈である。この「幼稚園」を譯したのは桑田耕平といふ人

である。この本はどちらかと言へば、幼稚園の實際に就て多くの事が記されてゐて、大變分りよい本であつた。つまり前の「幼稚園記」とこの「幼稚園」とを併せると、先づ當時に於ては、幼稚園の

理論と實際とに通ずることが出来たわけなのである。「幼稚園」の序は原序をそのまゝに譯さずに、譯者が序文を書いてゐる、しかし大體に於て、その述べてゐる主旨が原序に述べて居るところのものと異らないので、この點がこの著の瑕瑾であるそれから「箸ならべ」といふ遊戯の説明に、原著に於て箸を並べてABC等の文字を作るやうになつてゐるのに従つて、この譯書には箸を並べて片假名を作らせるやうになつてゐる、それだけならば原著の主旨を適用したのであるから差支ないのであるが、この譯書には假名を一通り習はした後に尙漢字を「箸ならべ」によつて習はしめやうと企てゝあるのである、これなどは、幼稚園教育の主旨が徹底してゐなかつた創始時代とはいへ、可なり

無考へな試みであつたと思ふのである。乍併這麼缺點は擧げるものゝ、この兩著は兎に角、我が國幼稚園の發生時代に於て、大いに重要な役目を果たしたのである。

その後、明治十一年六月に至つて、東京女子高等師範學校に保姆練習科といふものが設けられた而して、この時募つた生徒達が十三年の七月に卒業することになつた、その時の卒業生は十一人であつた。それは原田良、大澤嘉次、勝山貞、長竹國、武藤八千、山田千代、前原鐵、松本桂、福田布久、小林利、相原春の諸氏である。

私は是等の人々が卒業された後に、附屬幼稚園の幹事に就任したのである。この第一回の卒業生の中で、武藤八千、山田千代の兩氏は本校の附屬幼稚園に就職せられた、この第一回の卒業生の方々の中には大阪とか仙臺とか九州とかの各地に赴任せられて、その土地の幼稚園の草分けとなつたといふやうな人が多いのであるが、今一寸誰が何

處へ行つたか思ひ出せないのは遺憾である、たゞ一つ私の覚えてゐるのは長竹國氏が大阪へ行かれたことである、それは當時大阪の府會議員をして居られた豊田文三郎氏から、大阪へ幼稚園を拵へたいと思ふが、誰が適當な人を周旋してくれと、私の許へ申し越されたので、私は長竹氏を推したのである。乃で長竹氏は大阪へ行つて愛珠幼稚園を開かれた、而して非常に良好な成績を示されたそれがために大阪にはその後間もなく八つばかりの幼稚園が出来る位に保育事業が盛んになつた、東京にはその頃、附屬幼稚園の外にはまだ一つも幼稚園は増えてはゐなかつたのである、故にその頃大阪に如何に幼稚園熱が高まつたかを知り得るのである。

附屬幼稚園の幹事は關信藏氏が歿せられた後、神澤專三郎氏が任に就かれた、神澤氏は伊澤修二氏と共に文部省留學生として洋行をされた人である。神澤氏も今は既に世に亡き人である。神澤氏

の後を襲うて幹事の任に就いたのが私である。

その頃、幼稚園では、フレーベルの二十恩物の名を漢語に譯して用ゐてゐたので、大變六ヶ敷く子供には不向きであつた。私はこの漢語を和語に改めて、呼び易く、子供の耳に六ヶ敷く響かないやうな名稱に改めた、例へば原色三つと間色三つとの色糸でからげた球を六球と稱したのであるがこれは「むつのたま」と改めた、刺繡は「ぬひとり」摺紙は「かみたゝみ」、織紙は「かみをり」、剪紙は「かみきり」、刺紙は「かみさし」といふやうに、それ／＼改稱した。又三體即ち圓體、立體、長方體をも「まる」「しかく」「さしがた」といふやうに平易に呼び替へた。

保姆練習科は明治十三年七月に至つて一時廢止せられ、幼兒保育法は之を本校の課程に編入することゝなつた。

附屬幼稚園では初の頃は、宮内省から俗人が來て笏を打ち、琴を奏でながら、萬葉集や古今集の

歌を、幼児に唱つて聞かせてゐた。間延びのした眠いやうな節まわしで、意味の分らないことを唸られるので、幼児は自分達とは没交渉の音楽を退窟を凌んで、聞いてゐなければならなかつた。言ふまでもなく、幼児に取つては甚だ迷惑な音楽であつたのである。

乍併幼児は間もなく、この難儀な音楽から救はれるやうになつた。それは加藤さん氏が外國の唱歌から幼稚園に向きさうなものを選んで、翻譯し唱ふことの出来るやうに調子をとゝのへてくれたのである、而してこの唱歌を當時音樂學校の教師をしてゐた北米合衆國人ルーサル・ホイテング、メーンン氏がヴァイオリンに合はせて幼児に教へてくれるやうになつたのである。これで幼児は生々として來た、始めて愉快に遊ぶことが出来るやうになつた。古代語で幼児には縁の無いやうな思想感情を現した伶人の唱歌の後に、「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ」といふやうな、幼児に分り易い

唱歌を教へられることになつたので、幼児が喜んだのは無理もないことである。加藤さん氏は竹橋女學校の第一回の優等卒業生で、その後洋行したこともあり、謙遜な、善い人であつた。

メーンン氏は日本語が出来なかつたので岡倉覺三氏及び後、高嶺秀夫氏の夫人となられたる中村女史が常に通辯の勞を取つて居られた。メーンン氏はその頃、年齢は承知しないが、何でも六十に近かつたと思ふが幼児に非常に慕はれた、メーンン氏も幼稚園へ來るのを非常に喜ばれて、いのちが二十年も延びたと常に言ひ言ひして居られた。

メーンン氏は音樂學校の伊澤校長と性向が合はなかつたと見えて、常に不平に堪えぬげであつた。それで通辯をして居られた岡倉、中村の兩氏はメーンン氏の不機嫌の時は、自烈じれつられるので、閉口して居られた。しかし幼稚園へ來るとメーンン氏の機嫌はすつかり癒つて了つた、而して幼児のためにさも愉快さうにヴァイオリンを弾いて時の

移るのも忘れてゐるやうであつた、幼児もメーン氏の來るのを待つてゐて、メーン氏が來るとズボンにつかまつたり、手にぶらさがつたりしたものである。するともうメーン氏はニコ／＼、可愛くて堪らぬといふやうな顔をされるのであつた。這麼具合で幼稚園のためにも、メーン氏のためにも、誠に都合がよかつたのである。メーン氏は後、郷里亞米利加に歸つて亡くなられた。

明治十六年頃であつたかと思ふ、今のお茶の水の幼稚園の門と往還を隔て、向ひ合つたところに私立の小林小學校といふのがあつた、これは小林道清といふ人が經營してゐたのである。幼稚園はその頃毎日午後の三時に授業を終つたので、幼児の中には、幼稚園のかへりに、直ぐこの小林小學校へ行つて本を習ふものがあつた。是等の幼児の中には文部次官の辻新次氏の令息や普通學務局にゐた吉村寅太郎氏の令息などもまぎつてゐた。すると或日のこと、小林小學校の校主である小林

氏が私のところへ來られて、次のやうなことをいはれた。近頃あなたの幼稚園の生徒がかへりがけに私の學校へ來て、本を習つて行くがこれは何ういふものであらうか、單に自分の收入の上から言ふと、一人でも生徒の多い方が望ましいのであるが、幼稚園の生徒が本を習ひに來ることはあまりよろしいことではないと思ふ、幼稚園の生徒はもう幼稚園で彼等の頭腦で堪えられるだけの仕事をして來てゐるのである。それなのに、尙私のところへ來て、たとへ二行でも三行でも、本を習ふといふことは、子供にとつては退儀なことである。それ故私は何うも幼稚園の生徒が私のところへ來ることを黙つては居られない、それで親御達の意見をよく聞いてみたいと思ふ、しかし私の口からは言ひにくいから、あなたからよく聞いて貰ひたい、子供のためにも氣の毒であるし、又私自身としても收入の多きを望むがために、誰彼の差別なしに弟子入りを許すと思はれるが残念であるか

らといふのが、まア大體の主意である。誠に高潔な考であつて、私も小林氏の心の清さに感服したのである。乃で早速文部次官の辻新次氏に會つて小林といふものが斯う申してゐますが、あなたのお考へは何うですかと聞いてみた、すると辻氏も小林氏の高潔に感ぜられたが、子供は幼稚園から三時に歸つて來ると、時間が中途半端ちゆうはんぱんになるので小林のところへやつて置くので、別に何も教へて貰はなくもいゝので、たゞいゝ加減に時を過させ、てさへくれゝばいゝのだから、そんなに眞面目に責任を考へてくれなくてもよいのであるといふやうな返事であつた。私は小林氏にこの旨を傳へたこの結果幼児が小學校へ行くことを止めたか何うか私は今覺えてゐないが、兎に角這麼心持のよい話もあつたのである。

その後明治何年の頃であつたか、附屬小學校の最下級と幼稚園の最上級とを一緒に纏めて了つたことがある。これは、それまで幼稚園と小學校の

仕事が全然異つてゐたので、幼児をしてこの急變に耐えさせることは面白くないといふ説があつたからである。今でも幼稚園と小學校との連絡問題は種々の方面から重要視せられてゐるのであるがその頃もこの問題に對しては随分局に當る人々が頭を悩ましたのである。外國にはその頃幼稚園と小學校との間にコンネクテング・クラス(連絡級)又はインターミヂエート・クラス(中間級)といふやうなものがあつて、この問題が解決されてゐるといふことであつたが、附屬幼稚園に於ては之を設けることが出来なかつた、といふのは豫算内ですべての計畫を立て、行かなければならなかつたからである。乃で私は附屬小學校の主事をしてゐた理學士の鮫島晉氏と相談して、今述べたやうに小學校の一年級と幼稚園の上の級とを一つにして了つたのである、幼稚園と小學校との連絡問題は是で一先づ解決したのである。それがために幼稚園の上の級へ行くと幼児は片假名を習ひ始めるこ

とになつたと同時に小學校の一年生は又「かみた  
ゝみ」や何かをすることゝなつたのである、それ  
故幼稚園を完全に終つた者は同時に小學校の第一  
學年をも終つたことになるのである、乃で幼稚園  
を経ずに、いきなり附屬小學校に入學して來る生  
徒は一年級に入學せしめたが、幼稚園を卒業して  
來た者は、之を小學校の二年級に入學せしめたの  
である。

明治十七八年の頃であつたと思ふ、私は幼稚園  
の保姆と小學校の訓導とは待遇上權衡が取れてゐ  
ないのを遺憾に思つて、これを同一にせんことを  
文部省に願ひ出でたことがある。これは官制上小  
學校の訓導は本官であつたが、幼稚園の保姆は雇  
たるに過ぎなかつたからである。それ故に同じ級  
で勉強して卒業した人々でありながら、小學校へ  
行く人は本官となり、幼稚園へ行く人は雇となる  
といふことになるので、自然幼稚園へいゝ人を呼  
ぶことが出來ないことになつて了ふのであつた、

而かも同じ卒業生とはいへ、その人の性質によつ  
て小學校へ行く人と幼稚園へ行く人とがあるので  
あるから、待遇の相違のために、幼稚園保姆とし  
て適當な人を小學校の訓導とならしめて了ふやう  
なことがあつて、誠に遺憾なことが多かつたので  
ある。然るにこの願ひは遂に聽許されなかつた。

その理由は、幼稚園といふものは未だ世界各國に  
於て善しと認められてゐるのではない、言はゞま  
だ試験中のものである、それであるから保姆を本  
官とすることは尙早であるといふのである。大體  
上述の意味を記した長い符箋が附いて、この時の  
提出願書は却下されて了つたのである。尙この符  
箋には幼稚園は獨逸では社會主義を鼓吹するもの  
であるといふので禁止せられんとしてゐるなぞと  
書いてあつた、成程獨逸に於てフレーベルが社會  
主義を鼓吹するものと誤解せられたことはある、  
しかしそれは全くの誤解であつて、フレーベルの  
弟のカール・フレーベルが社會主義者で機關雜誌か

何かを經營してゐたことがある、しかしフレールはこれとは何の關係もなかつたのである。獨逸政府でも間もなく、その誤解であることを悟つたのであるが、文部省ではよく調べもせずに直ちにこの誤解のお取次ぎをして了つたのである。私はこの時文部省に出頭して、いろいろ話をしてみたのであるが遂に許されなかつた。しかし文部省でも、その後氣がついたらしく、さりとて間違つてゐたとも言へぬところから、幼稚園といふものに對しては黙許の態度を取つてゐたのである。

明治十七年の頃であつた、私は時の文部大臣大

木喬在氏に願ひして、加藤きん子女史を保育研究のため留學させて貰ふことにした。加藤女史は北米合衆國のボストン附近の女學校へ入學して專心保育を研究されたのである。然るに私は明治二十三年に壘啞學校の方へ轉任したので、加藤女史はその後歸朝せられたが、何ういふ都合であつたか、その研究せられた保育法を以て本校に勤務せられずに、英語の教師か何かをして居られたやうである、而して間もなく世を去られたのであるが我が國の保育事業發達のために惜しいことであつたと思ふ。(文責在記者)